

島国への憧れから 協力隊へ

湊 小さいころに『天国が一番近い島』を読んで、ずっと南の島に憧れていました。私にとつての、天国が一番近い島。はどこかと地図を見ていて、直感で引かれたのが「トンガ」。大学の卒業旅行で行こうと思っていたのですが、卒業前に阪神・淡路大震災が起こって、それどころではなくなっていました。

真戸原 僕は高校までは野球一筋。大学からバンド活動を始めました。いつか人に聞いてもらえるような音楽をつくれるようになりたい。その夢がかなったら、音楽を通じて誰かの役に立てることをしたいと思っていました。

湊 私はアパレルメーカーに就職してから、通勤バスの中で人生の転機が起こりました。青年海外協力隊の広告を見つけたんです。「海

巻頭 対談

世界をつなぐ青年海外協力隊

2015年、青年海外協力隊
事業が50周年を迎えた。
これまで世界各地で生み出され
てきたさまざまなストーリー。
協力隊を経て小説家にな
った湊かなえさん、
ミュージシャンの真戸原直人さんが
現役隊員の活動を視察したミ
ュージシャンの真戸原直人さん
その魅力を語



グアテマラの協力隊の教え子たちと歌のセッション



協力隊時代、トンガの派遣先の学校の先生たちと



© Shinichi Kuno

外に行くのにこういう方法もあるんだ」と驚きで、でも木を植えたり、井戸を掘ったりするイメージが強く、とても自分にできるものではないと思ったのですが、とりあえず説明会に行くことにしました。
真戸原 僕も小学生のころ、協力隊の紹介を教科書か何かで見たことがあるんですが、同じようなイメージを持っていましたね。海外にボランティアに行く人は、とにかくストイックで無欲。普通の人には手の届かないものだと思っていました。
湊 でも説明会でもらった冊子に、トンガで家庭科を教えるという活動があったんです。これは私が行くしかない！（笑）。面接でも「トンガじゃないと行きません」くらいの勢いでした。

真戸原 それは運命的な出会いですね。僕を国際協力に導いてくれたのは、プロ野球の和田毅投手でした。彼が1球投げるごとに10本ワクチンを寄附しているというCMを見

て、めちゃくちゃカッコいいなと。僕はミュージシャンとして、CDの売り上げの一部を支援に充てることにしたんです。
湊 そういう人生のタイミングは、大事にしたいです。長年の夢に手を伸ばせば届くところまできて、会社を辞めて協力隊への参加の道を選びました。父親も出張で海外によく行っていたので、理解はありましたね。

試行錯誤から 得られるもの

湊 トンガは治安も良く、気候もとても快適でした。イギリス保護国時代はフレンドリーアイランドと名付けられていたくらい人も親切で優しい。いわゆる開発途上国の過酷なイメージとは違いました。

真戸原 僕は2年前、協力隊員の方々に会いに、初めてアフリカに行きました。それがマラウイ。アフリカといえば「暑い」と思っていたので、少し肌

寒くて最初から驚きました。やっぱり、実際に行ってみないと分からないものですね。
湊 トンガにも、初めて知る課題がありました。現地の人たちは、お肉の脂身などが大好き。肥満が深刻でした。私が家庭科の授業で栄養バランスなどについて指導しても、「何が悪いんだ。神様の近くに行けるんだし、死ぬことなんて怖くない」の一点張り。知識として教えることはできても、実践に結び付けるのはとても難しかったです。
真戸原 僕が出会った協力隊員たちも、文化や習慣の違いに悩んでいました。でもみんな困難を自分の糧にしていて、現地の人たちの思いをくみながら、最善の方法を考える努力には頭が下がりました。その表情は生き生きとしていました。

湊 私は2年間、「私がここに来た意味は何だろう」と、ずっと葛藤がありました。それでも、同僚たちと一緒に教材作りを頑張ったり、健康的な食生活を広めるイベントを開催したりと、悩みながらもやりがいのある日々でした。
真戸原 そうやって、縁があれば人はつながっていくんですね。僕も現場でまさにそう感じたところなんです。世界の至るところで、彼らが日本との懸け橋になってくれていたんだと。僕は自分の体験を音楽に生かすことも多いのですが、湊さんは協力隊時代のことを小説にしないんですか？

小さな思いから 世界が広がる

湊 帰国してからは家庭科の講師になり、結婚して、小説家になって……。毎日いろいろなことに追われて、しばらくトンガとは疎遠になっていました。でもある日、「ホストファミリーが連絡を取りたがっている」と電話が来たんです。メールを使えるようになったから私と連絡を取りたいと、現地に仕事で訪れた日本人の方に聞いてくれたみたいで。うれしくて電話もしていました。

湊 実は私の小説には、たまにトンガの話が出てくるんですよ。協力隊は小説を書くために行ったわけではないですし、取材ノートが残っているわけでもない。でも10年以上たっても記憶に残っていることは、私にとって大切なことなんだろうなあと思っています。ずっと忘れられない、忘れたくない体験です。
真戸原 今回、協力隊50周年のイメージソングを担当させていただくことになりました。今まさに制作中ですが、キーワードは「つながる」です。協力隊に参加することで途上国の人たちとつながり、帰国後もその経験を通じて新たなつながりが生まれていく。そんな協力隊に感動、共感する人がいたから50年も続いてきた。それが伝わればいいですね。
湊 最近、若い人が海外に出たがらないと聞きます。世界を変えようとか、大きな志は必要ないんです。小さな思いがあるのなら、思い切って飛び込んでみてほしい。これまでの50年を次の50年につなげるために、もっと多くの人に協力隊について知ってもらいたいですね。

湊 かなえさん × 真戸原 直人さん

MINATO Kanae 小説家

1973年広島県出身。大学卒業後、アパレルメーカーを経て青年海外協力隊に参加。帰国後は家庭科の講師をしながら執筆活動を開始。2009年に『告白』（双葉社）が第6回本屋大賞を受賞。『夜行観覧車』（双葉社）、『白ゆき姫殺人事件』（集英社）などヒット作多数。

MATOHARA Naoto ミュージシャン

1977年大阪府出身。99年にロックバンド「アンダーグラフ」を結成。2004年にシングル「ツバサ」でメジャーデビュー。CDの売り上げの一部を開発途上国のワクチン購入に寄付するなどの国際協力に取り組み、協力隊の活動をマラウイとグアテマラで視察。